Cephapirin による皮膚化膿症の治療

高橋　久
帝京大学皮膚科

昭和 47 年夏季から 48 年春季にいたるまで，新 Cephalosporin 系抗生物質 Cephapirin を外来的に皮膚化膿症に投与して，見るべき成果を挙げたので報告する。

症　　例

患者は同期間中に当科を訪れた 20 例で，季節の関係上，もつとも多いのは膿痂疹の 17 例，それ以外は化膿性汗腺炎，白癬の 2 次感染，および顔面の丹毒であつた(Table 1)。

膿痂疹症例の年令は 1 才から 9 才までで，水疱が 1 コのものから，全身に多発したものまで，その症状の軽重はさまざまであつた。

分離されたブ菌はすべて coagulase 陽性のもので，化療標準法によつて測定すると，その MIC は 0.20 から 0.78 mcg/ml, 主として 0.39 mcg/ml (同時に測定した黄色ブ菌 209P株の MIC は 0.05 mcg/ml であつた) を示した。投与量は年令の幼いものでは 1 日 1 回 250 mg を，大きいものには 500 mg を筋注し，日曜日等は注射を休んだ。外用は多くの場合ソルベース単味を貼用し，できるだけ抗生物質の外用をさけたが，膿痂疹の場合その伝播の速やさかは，外用だけでは押え切れないものがある。投与日数は 3 日から 10 日であるが，3，4 日の短期投与症例が多いのは，後に述べるとおり，それだけの注射で充分な効果を収めたからであり，できるだけ幼児の嫌う注射は短期間で切り上げた。

いつぽう白癬の 2 次感染や，顔面丹毒の症例も成人とはいえ 1 日 500 mg の投与にとどめた。なお丹毒からは相当の努力にもかかわらず起炎菌は分離されなかつた。

効　　果

Table 1 からもわかるとおり，きわめて多くの膿痂疹

Table 1　Cases treated by cephapirin

No.	Age	Sex	Disease	Bacteriological finding		Dose	Effect
				Coagl.	MIC (mcg/ml)		
1	3	♀	Impetigo	+	0.39	500 mg × 3 days	++
2	2	♂	〃	+	0.20	250 × 4	+
3	4	♀	〃	+	0.39	500 × 4	+
4	7	♀	〃	+	0.39	500 × 7	+
5	7	♂	〃	+	0.39	500 × 3	++
6	9	♂	〃	+	0.39	500 × 4	+
7	6	♀	〃	+	0.39	500 × 4	+
8	2	♂	〃	+	0.39	500 × 4	+
9	5	♀	〃	+	0.39	500 × 3	++
10	2	♂	〃	+	0.39	250 × 3	++
11	4	♀	〃	+	0.39	500 × 10	±
12	2	♂	〃	+	0.39	500 × 5	±
13	4	♀	〃	+	0.78	500 × 6	+
14	4	♀	〃	+	0.39	500 × 4	++
15	1	♀	〃	+	0.39	250 × 3	++
16	3	♀	〃	+	0.39	500 × 3	++
17	5	♀	〃	+	0.39	500 × 4	+
18	1	♂	Suppuration	+	0.39	500 × 3	++
19	51	♀	Double infection (ringworm)	+	0.39	500 × 4	+
20	33	♀	Erysipelas			500 × 12	++

Table 2 Effects classified by disease

	Remarkably effective	Effective	Slightly effective	Total
Impetigo	7	8	2	17
Others	2	1		3

症例は3日の注射で，もはやそれ以上の注射を要しないほどに治癒ないし乾燥，改善をみた。

いちおう膿痂疹においては効果の判定規準を，このように3回の注射で充分と思われたものを著効，1週間以内に治癒にいたつたものを有効，1週間でも治癒にいたらなかつたもの，およびいたりそうもないほど改善のおそいものをやや効としたが，いずれも，ある程度の効果をもたらし，全く改善をみない無効症例や，治療にもかかわらず，病勢悪化するような症例は1例もなかつた。結果の総括は Table 2 のようで，17 例中著効 7 例，有効8例，やや効2例ときわめて良好な結果を示した。

膿痂疹以外でとくに言及したいのは 33 才の丹毒の女性であつて，すでに1週間以上も前から連日，38.9℃の発熱と，顔面ことに額部を中心とする眼囲，頰におよぶ発赤，浮腫と熱感があり，発赤は次第に増悪してその上に浅い水疱を多数生ずるようになつた。なお，この患者は15～6年前に左顔面神経麻痺を患らい現在も麻痺が残つている。この症例に本剤 500 mg を1回筋注したところ，その日から発熱は 36.5℃ に低下し，2，3日で発赤も去つたので著効と判定したが，なお患者の希望で，計 12 本の注射を行なつた (Photo 1, 2)。

Photo 1 Facial erysipelar before treatment

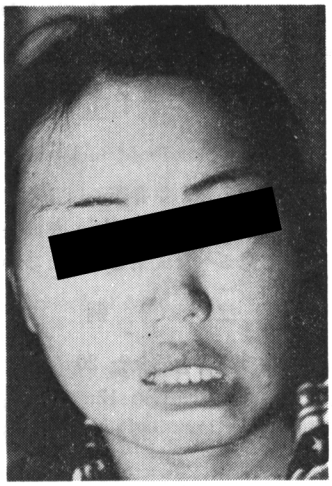

Photo 2 Facial erysipelar 1 week after treatment

副　作　用

とくべつな検査を治療の前後に行なわなかつたが，いちおう幼児，小児の食欲の有無，活潑さの程度について質問して，とくに異常をみとめず，また発疹性の副作用もみとめられなかつた。

総　　括

本剤は筋注用として，内服の不可能な幼小児のブ菌感染症例，とくに膿痂疹にはきわめて良い治療剤であると考える。その投与量は1日1回で1回 500 mg で充分であつた。膿痂疹はその拡大のすみやかさから，抗生物質の全身的投与が好ましいものと考える。

本剤は近時稀な顔面丹毒に投与してやはり著効を収めた。

本剤の MIC を化療標準法で測定して coagulase 陽性ブ菌には主に 0.39 にピークを有し，209P 株は 0.05 であつたが，いつぽう coagulase 陰性株ではむしろ 0.20 にピークを有していた。

TREATMENT OF PYODERMA WITH CEPHAPIRIN

HISASHI TAKAHASHI
Department of Dermatology, School of Medicine, Teikyo University

Twenty cases of suppurative skin disorders were treated clinically with cephapirin, a new cephalosporin derivative.

Excellent improvements were revealed almost in all cases especially in those with impetigo.

M.I.C.s of the causative organism were measured by plate dilution method. The results indicated 0.39 mcg/ml in most strains and 0.20 mcg/ml in lesser strains.